

【「みんなの食堂」運営モデル実証業務 事例紹介】

実施団体名	東地区ちいきの絆食堂（代表 中田早樹子）（弘前市）
実施年度	令和2年度
実施概要	弘前市において、地域の子供や大人を対象とした「東地区ちいきの絆食堂」を開催した。

1 東地区ちいきの絆食堂について

地域のつながりが希薄化する現代において、今一度、子供達を中心とした地域づくりが必要と考え、その起点になればとの思いから、「東地区ちいきの絆食堂」を立ち上げ、平成29年12月から食堂を開催している。孤食や個食の改善のための食事の提供、学習習慣定着のための学習支援、基本的な生活習慣のための生活支援を目的に毎月1回程度、食堂を開催している。

2 「みんなの食堂」開設のきっかけ

1に同じ

3 「みんなの食堂」の概要

地域の子供、大人を対象とした「東地区ちいきの絆食堂」を開催した。
(令和2年度：4回開催（8回予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で4回中止となった。)

(1)参加対象

地域の子供～大人まで。他地域の見学も歓迎

(2)参加料

高校生以下無料、大人300円

(3)周知方法

SNSでの周知

子どもの居場所づくりのリーフレットやみらいねっと弘前のネットワークでの宣伝

町会の回覧板で「東地区ちいきの絆食堂通信」の回覧

学区の小中学校へのチラシ設置

(4)運営方法

① 12の町会からなる「東地区町会連合会」の共催で食堂を開催

町会長定例会議での活動報告、相談により、各町会の理解を得ると共に、地域活動の課題を共有。町会との共催により、活動場所である弘前市総合学習センターの使用料の減免を受けている。また、食堂開催時は、毎回、町会関係者が参加してくれている。

② 東地区ちいきの絆食堂スタッフのほか、町会関係者や教育関係、弘前大学ボランティアセンターの学生による学習支援、高校教諭や高校生による調理指導など、様々な人の協力を得ながら活動している。

③ 新聞やSNSを見た人からの寄付、みらいねっと弘前のフードバンク活動からの食材提供、地元農家からの野菜や果物の提供、飲食店からの食材提供などの支援も受けている。

④ 「東地区ちいきの絆食堂通信」を作成し、活動報告や次回食堂開催のお知らせを行っている。

(5) 開催日及び参加人数

	日 時	場 所	参加者
1	令和2年7月29日(水) 16:00~19:00	弘前市総合学習センター	49名(子供31名、大人18名)
2	9月13日(日) 10:00~13:00	〃	35名(子供20名、大人15名)
3	9月30日(水) 16:00~19:00	高崎町会集会所	53名(子供32名、大人19名、 ボランティア2名)
4	12月25日(金)11:00~19:00	弘前市総合学習センター	28名(子供16名、大人7名、 ボランティア5名)

(6) 各回の内容

【第1回】 令和2年7月29日(水)16:00~19:00 参加者数：49名(子供31名、大人18名)

①調理及び食事

感染防止対策として、使い捨ての容器を使用し、後片付けの時間を大幅に短縮した。時間に余裕ができたことで、スタッフの意見交換の時間を持つことができた。

メニュー：ちらし寿司、冷たいおそば

②学習支援

弘前大学ボランティアセンターの学生による、ZOOMを使ったオンライン学習支援を実施。参加した子供達は、スクリーンの中の大学生に質問などをして楽しく過ごした。

③その他

子供達を元気づけるため、弘前市非公認キャラクター「ヤーヤドン」も駆けつけてくれた他、文房具の提供など、地域の方から多数の支援があった。



ZOOMを使った学習支援



ちらし寿司

【第2回】 9月13日(日) 10:00~13:00 参加者数：35名(子供20名、大人15名)

①発酵料理教室

弘前市内で発酵料理教室を開いている三和文子氏を講師に、麴と醤油を寝かせて作る醤油麴と季節の野菜をふんだんに使ったキーマカレーを作った。

講師：三和文子氏

メニュー：発酵キーマカレー



募集チラシ



講師の三和文子氏

【第3回】9月30日(水) 16:00~19:00 参加者数:53名(子供32名、大人19名、ボランティア2名)

①調理と食事

前回講座で習った発酵キーマカレーを作った。

メニュー:発酵キーマカレー

②学習支援

ZOOMによるオンライン学習支援などを実施した。



学習する子供達

【第4回】12月25日(金)11:00~19:00 参加者数:28名(子供16名、大人7名、ボランティア5名)

①調理と食事

弘前実業高校の教諭と生徒が講師となり、子供達と一緒にクリスマスお楽しみプレートを作った。実業高校生たちは、りんごのデザートスープづくりをしながら、子供達とコミュニケーションをとり、いつもと違う高校生のお姉さん達に照れくさそうにしている子供達の姿が印象的だった。

また、スタッフからクリスマスケーキのサプライズがあったほか、みらいねっと弘前から、子供達1人1人にプレゼントが届けられた。

初参加の母親達が後片付けを手伝ってくださるなど、参加者が積極的に関わってくれることに心から感謝した。

メニュー:クリスマスお楽しみプレート(ナポリタンスパゲッティ、カボチャサラダ、ご飯他)
りんごのデザートスープ



調理する高校生と子供達



クリスマスお楽しみプレート

【その他の活動】

委託事業とは別に、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため食堂開催を自粛している期間に、弘前エール飯とのコラボ企画として、東地区の飲食店のメニューをお弁当にして提供した。(小中学生は無料、全5回実施)



チラシ



お弁当配布の様子

(7) 新型コロナウイルス感染症対策

参加者を把握できるように事前予約制とし連絡先を把握した他、予約がない場合も連絡先を確認し、何かあった場合にすぐに連絡がとれるようにした。

また、当日は、マスク着用と検温・手指消毒を実施した。

4 参加者からの感想

《子どもたちの感想》

- ・ みんなで食卓を囲んで、家族以外の人たちと一緒にご飯を食べるのは楽しい。安心する。
- ・ 宿題の勉強を学生や大人から聞くことができ、わからない部分を解決できた。
- ・ 調理は自宅でやるのとは違って色んな学びがあって楽しかった。
- ・ 親以外の大人と関わることができて楽しかった。

《大人の感想》

- ・ 家では一人で食べる機会が多いが、子どもたちと一緒にご飯を食べることができてうれしい。
- ・ 子どもたちの声を聴いて、笑顔を見て元気をもらう。
- ・ 参加を重ねることでお互いの顔がわかるようになり、地域での見守り活動に繋がる。

5 まとめ・今後の課題

- (1) 地域のために何かしたいという想いはあるが、地域の団体がどこでどのように活動しているのかわからない人も多く、また、食事の提供が本当に必要であるのか、親は何をしているのか、などという偏見もあるようで、子どもの食堂の開催は、内輪だけの活動、自分には無関係であると感じていたとの声も聞かれた。
- (2) 子ども食堂という言葉に「貧困」や「ご飯を食べられない子供が行くところ」という印象を持つ人もおり、子ども食堂の貧困のイメージを払拭し、誰もが気軽に集える居場所として地域の方々に理解していただくためには、宣伝も大事であるが、地道に活動を続け、口コミで広がっていくことが継続した活動のために有効な方法であると考えます。
- (3) 食育は大切であるが、コロナ禍にみんなで一緒に食卓を囲むことに批判的な状況であり、コロナの影響で活動を休止することが多いため、新しい参加者を募ることに躊躇してしまう。令和2年は、新型コロナの地域でのクラスター発生などに影響を受け、予定していた活動が思うようにできない年であった。
- (4) 「食育基本法」では、食育を「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」としている。子どもの食育に関与する中で、大人が食への理解を深めていることが大切であり、子どもから高齢者まで、ライフステージに対応した食育が必要である。多世代交流の拠点として、子どもだけでなく一人暮らしの方などにも参加していただけるようなシステムづくりが必要である。
- (5) コロナ禍における活動の在り方、スタッフや参加者が感染源にならないために、一人一人が気を付けるべき事項に関して今一度確認し、共有することが大切である。その際、本来の目的である共食とは異なるかもしれないが、コロナに限らず季節的な感染リスクが高い時季でも活動を継続していくために、お弁当にして各自持ち帰るなどの対応も考えていきたい。